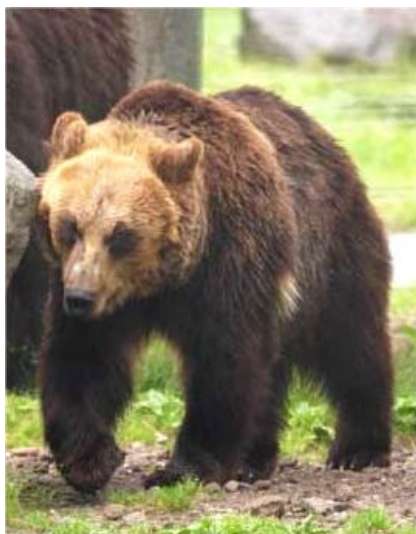


異常気象によって深い森を追われた熊たち。そしてその熊によって里山を追われたオリエンテーリング大会。オリエンテーリング競技は自然の生態系と里山のバランスの上に成り立っていることを感じさせる 2004 年だった。



北陸の大会は軒並み中止に

北陸地方では、昨年の秋のシーズンに例年どおりのオリエンテーリング大会を計画していたが、熊の出没などにより、軒並み大会の中止や変更を余儀なくされた。

富山県内においても、夏の終わり頃から熊の目撃情報がちらほら地元のマスコミで報道されていたが、9月下旬以降はほぼ毎日のように新聞に掲載され、実際に人に被害があった場合には大きく取り上げられた。

新聞報道によると、16年4月以降10月末現在の捕獲件数は、全国の捕獲件数1358頭のうち、富山県が102頭（15年度全体では27頭）、石川県が158頭（同37頭）、福井県が187頭（同12頭）であり、実に1/3が北陸3県で捕獲された。また、この期間で人に危害を与えた人身事故の被害人数が富山県では24人（昭和63～平成15年度までは各年度5人未満）と最も多く、全国での

被害人数95人の25%を占めた。

地元行政からの指導

このような状況において、オリエンテーリング大会を開催して参加者をあえて山の中に入れることは、熊に対する安全対策がとれないことから無理があり、11月に予定していた富山県オリエンテーリング大会は、地元行政からの指導もあり中止せざるを得なかった。

また、福井県では同じように大会が中止されたほか、石川県では、参加者に熊よけの鈴を貸与するとともに役員を多く配置したり、大会直前に急遽場所を変更して安全なトレインで開催するなど苦労されたと聞いている。

熊だって懸命に生きている

今年度、熊の捕獲件数や人身事故の被害人数が急激に増加したのは、熊が人里に出る頻度が高くなっているためであり、原因として、フェーン現象などによる夏の猛暑や相次ぐ台風等の被害により、熊のすみかである奥山にドングリなどの餌が少なくなったことや、奥山と人里の間に存在し、熊と人間を隔てる役割があった里山と呼ばれる場所が人口の減少などにより荒廃したことなどを、専門家は指摘している。

実際に捕獲（射殺）された熊の胃袋には餌が入っておらず、冬眠を前にして空腹で人里まで下りてきて柿などの餌を探していたところで、捕獲されたり、人間に出会うとびっくりして襲ったりすることから、熊にとっても可愛そうなこともある。

新聞などでは、捕獲した熊について、数が少なくなっている熊の保護と人間への危害の防止という相反する考えからどのように取り扱い、どのように共生していくのかという意見や、里山の再生を訴える意見が掲載されている。

今後活動が出来るのか？

オリエンテーリングに関しても、今年度と同じように来年度以降も頻繁に熊が出没するようだと、大会を開催できる場所が都市部の公園や海岸部分などごくわずかに限られてしまい、我々

の活動が停滞してしまうことになりかねない。これは、アウトドアスポーツ全般に通じることでもある。取り越し苦労であればよいのだが、今後活動が制約された場合の対応も考えておかなければならない。

（山口敏夫）



合宿で談笑する山口氏。
富山 OLK による 2003 年妙高高原合宿。
この秋は北陸でオリエンテーリングに汗する機会もめっきり減った。

福井/新潟の水害に始まり、北陸3県でのクマ騒動。そして中越地震。自然の異変に振り回された北陸の2004年オリエンテーリング界だった。